

3. 談話会の頃 池上 忠弘（成城大学名誉教授）

いま全く未知の世界に向って突き進んでいる者にとって、20年ないし50年も昔の事柄を記すには、確かな証言である『中世英文学談話会会報』1号-22号（1965〔昭和40〕年6月-1984〔昭和59〕年11月）を参照しながら体験談を述べざるをえない。その物語をこれから語ることにしよう。

東京の中世英文学談話会の歴史は2つの時期に分けられる。第1期は1955（昭和33）年1月22日から1963（昭和38）年10月26日までの、原則的には月例会を69回行った9年間。第2期は1965年6月26日に再開された第1回例会から1984年7月14日第32回研究発表会を終えて発展的に解散した、年2回6/7月と11/12月開催の学会形式による20年間である。

第1期の記録はノートブックに記されている。1954年12月17日、最初の相談会が明治学院大学でもたれ、第1回談話会は1955年1月22日明治学院大学で開かれ、6名が参集して、繁尾久さんが「アングロ・サクソン文学の展望」を発表された。その時から会の中心にいたのは繁尾久、都留久夫、寺澤芳雄の3氏である。

明治学院大学と国際基督教大学の人たちによって始められた談話会に東京女子大学が加わり、ついで慶応大学が参加した。私が初めて出席したのは、第7回（55年10月29日）高橋源次先生の「英国中世劇 *Townley Play* について」の時であった。鈴木孝夫さんから行ってみたらどうかという声をかけられ、当時演劇に関心があったので進んで参加した。小さなグループではあったが、熱気に溢れていた。毎回発表者は1人で、制限時間がないので1時間以上しゃべった。この準備だけでも大変な仕事であったが、話し終えてホッとする間もなく、やがて教示、コメント、質問が次々と飛び交い、議論となり、延々と発言が続き、それが消えてなくなって終りとなる。随分鍛えられた。若い研究者が少しづつ集まり、いわば同士の *society* となった。仲間となり、お互いに情報交換をする必要もあった。出席者は少なかったが、みな一生懸命勉強し、熱心だった。2年目には都留さんの後を継いで事務連絡係を1年間つとめた。私の最初の発表は少し遅れて、1957年2月23日「*The Role of Gawain in Arthurian Romances*」の題目でしゃべった。当時、*Sir Gawain and the Green Knight* を読んで非常に面白かったので、中世のアーサー王伝説の中に入れて考えてみた試みであった。また、1956年12月1日に、Dr D. S. Brewer がICU構内の清水護先生邸で「*Mediaeval Studies in England*」としてケンブリッジ大学の概要を話され、真暗な夜道を帰途についたことを今でも鮮明に覚えている。研究発表者は若い者ばかりでなく、ベテランの荻田元司、一色マサ子、宮部菊男、山川喜久男、鈴木重威、外山滋比古、倉長真、西脇順三郎の諸先生方も話してくださった。こうして次第にのめり込んでいった。

1960年代になると大学紛争の激しい時代に入った。定期的な会合を開くのが難しくなり、努めて開催するように奮闘したが次第に人の集まりが悪くなった。1963年10月26日、明治学院大学で鈴木栄一さんが「*Morte Arthure* の文体について—特に *second half-line* の構成

を中心として」を公表したときには、聴衆は繁尾さんと私 2 人だけとなった。ここで 2 年近く中断、休会した。1965 年春に再開された第 2 期談話会は、会則をもち会報も刊行して、非公式ながらも完全に年 2 回開催の学会形式をとったものになった。名簿によれば、会員数は 60 名からはじまり、72 年には 108 名、79 年には 203 名と全国規模で驚くほど増えていった。研究者同士は個人的には日本英文学会や関西の中世英文学研究会などの折に出会ってお互いに面識があった。私自身、斎藤勇さんや生地竹郎さんとはだいぶ以前から知り合っていた。1967 年の 5 月、東北学院大学で日本英文学会全国大会が開かれたとき「中世研究者の集い」がもたれた。60 余名の人たちが参集し、相互親睦とともに全国的な学会創設が議論されたが、慎重論が優勢で、学会問題は延期となった。

新しい談話会では、個人の研究発表のほかに、シンポジウムが設けられた。その第 1 回は 1967 年 11 月 25 日、明治学院大学で寺澤芳雄、中尾俊夫、鈴木栄一、池上（司会）による「*Sir Gawain and the Green Knight* について」が行われた。第 2 回シンポジウムは 1968 年 11 月 30 日、青山学院大学で「*Chaucer: The Book of the Duchess* について」（繁尾久 [司会]、生地竹郎、都留久夫、小長谷弥高）、第 3 回は 1969 年 7 月 12 日、慶応大学で「*Beowulf* をめぐって」（寺澤芳雄 [司会]、忍足欣四郎）があり、以後恒常化された。

談話会の当番校を務めたあと、幸いにも 1970 年から 72 年にかけてイギリス留学の機会が与えられた。目指すケンブリッジ大学とオックスフォード大学に滞在し、写本研究を軸においた基礎的な勉学に励んだ。午前中は教室、午後は図書館という生活だった。実に快適だった留学はこれが初めてでこれで終わりだと当時思っていたので、どこへでも出掛け、何でも吸収し、何でも見てやろうとした。ヨーロッパ大陸旅行もし、トルコまで行ってみた。ケンブリッジでは、ブルーア博士とドロクケ夫妻主催の大学院生セミナーは若い研究者と触れ合うよい機会でも楽しかった。帰国直前には勧められて、ブルターニュのナント大学で開かれた国際アーサー王学会に出席したことは大きな収穫であった。研究発表会に参加し、著名な学者たちに直接会うこともでき、開催地の名所への遠足——この時はアンジェへのバス旅行——があった。パリはフランス文学の松原秀一さんの紹介をきっかけに、カルチェ・ラタン地区に滞在することを覚え、そこに在るクリュニー美術館や書店にはよく出入りした。この学会は三年ごとに国際学会が開かれるので、その後続けて出るようになった。夢のようである。

もうひとつ重要な学会は *The New Chaucer Society* である。1979 年 4 月、その創立第 1 回国際会議がワシントン D. C. で開かれ、それに出席した。数人の日本人学者が来るものと思っていたが、お会いしたのは寺澤芳雄さんだけであった。その後、第 3 回の学会がサンフランシスコの或るホテルで開かれた時は、都留さん、河崎征俊さんと私の三人で行った思い出がある。ロサンゼルス経由で、まずハンティントン図書館へ寄った。都留さんがエルズミア写本を借りだしたので、有名な写本の本文を間近かで読むことができた。私はラングランドの写本を見ていた。そこで George Kane 教授と E. T. Donaldson 教授とたまたまお会いし、いろいろお話をした。それからサンフランシスコへ向った。この時がきっかけ

で、9年間ほど学会のお手伝いをするようになった。

こうして1983年頃から、いよいよ日本中世英語英文学会創設の動きが活発になり、談話会と研究会の代表が会合を重ね、東西の組織をそれぞれ解体して、新しい学会として発足することになった。1984年12月15日、明治学院大学で学会創設総会が開かれた。実質的な第1回全国大会は翌1985年12月7日・8日、青山学院大学で開かれた。この時、私は2度目のイギリス留学で、日本を離れていた。